

世界詩集



編訳者略歴

明治 31 年(1898年)高知市に生る。

六高を経て東大ドイツ文学科卒業。

法政大学、第一高等学校教授、東京大学講師を歴任。

現在独仏文学研究の傍ら詩作に親しむ。

主要著書『心の運歴』『詩と友情』『詩心の風光』『精神の風土』

『泉のこだま』『片山敏彦詩集』『クレール』など。

訳書 ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』『ベートーヴェンの生涯』『ゲーテ詩集』『ハイン詩集』『ヘッセ詩集』『カロッサ詩集』『リルケ詩集』モロア『文学研究』その他。

アポロン叢書 1 © 1960 世界詩集

昭和 35 年 4 月 5 日 発行

¥ 450

編訳者 片 山 敏 彦

発行者 加 瀬 正 治 郎

印刷者 橋 本 伝 四 郎

発行所 東京都千代田区 アポロン社
 九段 1 - 20

電話 (331) 3197・振替東京97720

同興印刷・橋本製本

序

若い頃から折りにふれて訳した詩の草稿の中より選んでこの集を編み、題して『世界詩集』としたが、しかしこれは世界の諸国の代表的な詩を網羅する意図のもとに作られた選詩集ではない。四十年ほどのあいだに、そのときどきに読んで共感をおぼえ、なおよくそのイマージュを心に確かめたいために訳してみたものが、いつしかかなりの数に達したために茲に一巻としたのである。

もとより詩の翻訳は厳密な意味では可能でさえもない上に、微力をもってしたこの試みが、原詩の生命をきずつけること多きをはなだ危懼しながらも、これを敢えて世に問うのは、私にこれらの原詩に触れたときの魂のよろこびが、拙ない日本語を通じてでもいくらか人々に伝わることもあればとの念願からである。かえりみて、数十年の人生の道を思うとき、これらの詩人たちから受けた詩心の照明がなかったら、私の内生活はどんなに索莫たるものであったことだろうか！

ポール・エリュアールは「自分のための最良の選詩集」を一九四七年に編んだとき、そのフランス詞華集の巻頭にロマン・ロランの『内面の旅路』の中の、「スピノーザの閃光」の章の

次のことばを格言として置いた——

「人が一冊の本を読むときその人は、決してその本を読むのではない。人は書物を通じて自身を読み取る。そしてその結果、人は自分を発見したり、自分を吟味したりする。そして最も客観的なことどもは最も錯覚的なことどもである。」

もちろんこれは気ままな無秩序な主観主義や独善主義への讃辞ではない。

私は四十年近く前の早春の一日を今も思い出す。その朝、雪が降りやんで、小さな庭に薄日がさしていた。垣根に近く立っている一本の樹が、まだらに雪のつもっている枝々を白いつばさのようにゆっくりと振りうごかしていた。一瞬間、その樹が私にとって、樹であり人間のようであり霊のようであり、また一種の星のようでもあると思われた。このかすかな光の幻覚はたちまち去ったが、その印象が一種とくべつな喜びの感で心に残り、この内部の照明によって、ノヴァーリスやタゴールの詩句の中に多元の意味の交響が作る焦点が感じられるようになり、このときから私は詩のヴィジョンに誓いをたてた。

現代ギリシアのニコス・カザンツァキスの三万三千三百三十三行の叙事詩『オデュッセー——その現代的続篇』の中の一行をここに記す——

「おお 頭脳よ うぐいすたちが来て歌う花々であれ！」

一九五九年十一月

片山敏彦

目次

序

I

太陽讃歌		エクン・アトン	二五
愛の女神アフロディーテへの頌歌		サッポー	一六
短詩		プラトン	一八
春		カーリダーサ	一九
漁夫		李	白三
絶筆の詩		李	白三
心の中に故郷の家を		杜	甫三
舟行		杜	甫三
見よ青空を		ハーフィス	二五
たそがれに光る明星―「セルマの三つの歌」			
より―		オシアン	二六
太陽讃歌		サン・フランチェスコ	二七
ヴィジョン		ダンテ	元
幾多の歳月		ミケランジェロ	二〇
花		ブレイク	二
友トーマス・バッツに		ブレイク	三
全存在が一つの貝殻		ワーズワース	二七
生涯の最後の詩句		エミリー・ブロンテ	二八
草の葉		ホイットマン	四〇
わたしの知る唯一のニュース			
夕べ		エミリー・ディッキンソン	四四
静かな点のため以外には		ペター・アイ	四四
揺籃の歌		T・S・エリオット	四六
		ガブリエラ・ミストラル	四六

頂上……………	ガブリエラ・ミストラル 四七
太陽よ……………	ウナムノ 四七
おんみの心と……………	ヒメネス 五三
めたくしは……………	ヒメネス 五三
音楽……………	ヒメネス 五三
夜曲……………	ヒメネス 五三
永遠の少女……………	ヒメネス 五三
梢をめぐつて……………	ヒメネス 五三
地面の上の花びら……………	ヒメネス 五三
光……………	ヒメネス 五三
牧歌……………	ヒメネス 五三
はるかな海……………	ヒメネス 五三
新しい葉……………	ヒメネス 五三
鳥の心……………	ヒメネス 五三
秋の風……………	アルゲジ 五三
飾りけのない出会……………	メツチュ 五三
太陽の沈んだところで……………	ティンマー マンス 七
すべてのものの核心は……………	ティンマー マンス 七

あの月のように……………	ティンマー マンス 七
第二の誕生……………	パステルナーク 七
名高いということ……………	パステルナーク 七
世界……………	コステイス・パラマス 七
眼への頌歌……………	コステイス・パラマス 七
ロマン・ロラン……………	コステイス・パラマス 七
絶望しながらも……………	タゴール 八
あなたはわたしの心の静寂の中に……………	タゴール 八
あらゆる星が……………	タゴール 八
夜も昼も……………	タゴール 八
『白鳥』より……………	タゴール 八
母の姿を思い出せない……………	タゴール 八
死をくぐり……………	タゴール 八
裸身……………	タゴール 八
自由の中に……………	タゴール 八
ニルヴァナ（涅槃）……………	オーロピンド 九
神の薔薇……………	オーロピンド 九
他のかずかずの地球……………	オーロピンド 九

I

池……………	ジャン・ラシーヌ	二三
眠れるボアズ……………	ヴィクトール・ユゴー	二六
口没……………	ヴィクトール・ユゴー	二三
金言詩句……………	ネルヴァール	二五
夕暮の調和……………	ボードレール	二四
死……………	ボードレール	二五
めずらしい異邦の香り……………	ボードレール	二六
なぜ海の眺めは……………	ボードレール	二七
ためいき……………	マラルメ	二八
海の風……………	マラルメ	二九
白き月……………	ヴェルレーヌ	三〇
大きな黒いまどろみが……………	ヴェルレーヌ	三二
海はかずかずの伽藍よりも……………	ヴェルレーヌ	三三
鳥たちから羊の群から……………	ランボー	三四
温室……………	マーテルリンク	三五
おぼろげな捧げもの……………	マーテルリンク	三七

夜の祈り……………	マーテルリンク	二八
妖しい花……………	ヴェルハーラン	三〇
人々の仕事……………	フランシス・ジャム	三一
さくろの実……………	ヴァレリー	三三
うしなわれた葡萄酒……………	ヴァレリー	三四
わが孤独……………	ヴィルドラック	三五
灯台守……………	ヴィルドラック	三六
やさしい口の片隅に……………	デュアメル	三九
心配に見舞われている……………	デュアメル	四〇
すべてが失われてはいないだろう……………	デュアメル	四一
……………	ルネ・アルコス	四二
一つの別の魂が進み出る……………	ジュール・ロマン	四三
窓……………	シュヌヴィエール	四七
樹木……………	デュルタン	五〇
死者たちの血……………	マルチネ	五一
一九一八年十一月十一日月曜日……………	マルチネ	五四

風の詩……………レオン・ドーベル 一六五

ロマン・ロランへの頌歌……………

……………シャルル・ボードワン 一六六

III

鷹の歌……………キユーレンベルク 一六七

帰郷……………フォーゲルヴァイデ 一六八

いたるところで……………フォーゲルヴァイデ 一六九

「神へ往く心の旅」より……………メヒティルト 一七〇

早く逝きし者らの墓……………クロツプシュトゥック 一七一

夏の夜……………クロツプシュトゥック 一七二

愛する者を身に近く感ず……………ゲーテ 一七三

悲しみの歡喜……………ゲーテ 一七四

旅びとの夜のうた……………ゲーテ 一七五

月にささぐ……………ゲーテ 一七六

淨福的な憧憬……………ゲーテ 一七七

マリエンバートの悲歌……………ゲーテ 一七八

ハーテム……………ゲーテ 一七九

復帰の讃歌……………ミロス 一八〇

愛……………ミロス 一八一

クリスマス・ローズ……………エレヌ・モランジュ 一八二

ハーフィスに……………ゲーテ 一八三

あこがれ……………シラー 一八四

よそから来た少女……………シラー 一八五

ヒュペーリオンの運命の歌……………ヘルダーリン 一八六

朝……………ヘルダーリン 一八七

希望にささぐ……………ヘルダーリン 一八八

思ひ出……………ヘルダーリン 一八九

散歩……………ヘルダーリン 一九〇

夜……………ヘルダーリン 一九一

詩……………ノヴァーリス 一九二

旅びとの格言……………アイヒェンドルフ 一九三

夜……………アイヒェンドルフ 一九四

ふるさと……………アイヒェンドルフ 一九五

はるかなる地平の方に……………	ハイネ 二三
君は花のごとく……………	ハイネ 二四
外の面に吹雪……………	ハイネ 二五
白い樹の下影にすわって……………	ハイネ 二六
ランプに寄す……………	メーリケ 二七
森のどこかに……………	メーリケ 二八
秋の絵すがた……………	ヘッベル 二九
ふたたび逢わじ……………	ヘッベル 三〇
七月……………	シュトルム 三三
麦の中の戦死……………	リリエンクローン 三三
日は沈む……………	ニーチエ 三三
雨後……………	デーメル 三七
静かな町……………	デーメル 三八
われらはぶなの並木の……………	ゲオルゲ 三九
早春……………	ホフマンスタール 三〇
ときどき母は思う……………	リルケ 三三
大きな不思議な花のように……………	リルケ 三三
『愛』より……………	リルケ 三四
『少女達の歌』より……………	リルケ 三七

『マリアへの少女達の祈り』より……………	リルケ 二六
或る四月の中から……………	リルケ 二九
たとえあなたが私の眼の光を……………	リルケ 二四〇
昼の光がおんみの梢の中で……………	リルケ 二四一
『ドゥイノの悲歌』第九歌……………	リルケ 二四二
別離……………	リルケ 二四七
美しい蝶……………	リルケ 二四八
わが愛する母に……………	ヘッセ 二四九
かそけき雲……………	ヘッセ 二五〇
エリーザベツト……………	ヘッセ 二五一
高原の夕暮……………	ヘッセ 二五二
行く旅の路すがら……………	ヘッセ 二五三
九月……………	ヘッセ 二五四
夏の宵の提灯……………	ヘッセ 二五五
『魔笛』の入場券を持って……………	ヘッセ 二五六
エクス・アトンの太陽讃歌……………	ヴェルフエル 二五八
春に……………	トラークル 二六三
澄みわたる秋……………	トラークル 二六四
魂の春……………	トラークル 二六五

古い泉……………

カロツサ 二六七

「夕べの国」の悲歌……………

カロツサ 二六八

かがやきのみなぎる夜……………

一如……………

クリスチアン・ヴァーグナー 二六一

夏……………

シュテファン・ツヴァイク 二六九

千度も……………

クリスチアン・ヴァーグナー 二七〇

夏……………

クリスチアン・ヴァーグナー 二七〇

月は羊……………

モルゲンシュテルン 二七三

膝……………

モルゲンシュテルン 二七四

ぼくは希望を持つ……………

ヴァルター・パウアー 二七五

解説……………

二七六

世界詩集

神は 星から星へ火をともし。

ロマン・ロラン

或る流動の神が

人類の かずかずの血管を流れる。

ヴァクトール・ユゴー

I

太陽讃歌

エクシ・アトシ

天の光の山から あなたは堂々と昇る、
永遠の太陽よ いのちのみなもとよ

あなたのかげやきが 東の空に射し出ると
世界があなたの美しさに照りわたる。

あなたは美しく あなたは偉大です。

天上からのあなたのきらめきは あなたが作って育てる万物をつつみます。

あなたは勝ち誇ってわれらすべてをとらえ
われらすべてを あなたの愛でつなぎます。

西の空にあなたが沈むと

世界は全く暗くなり 世界のいのちが死に絶えたかのようです。

人間たちは自分の室で眠り 呼吸の歩みが変わり

眼は ほかの人間をもう見ません。

そのとき人間たちは 何ものをも所有しません。

なぜなら彼らは 死者同然に 何も知らなくなっているのですから。
盗む野獣らが 洞の巢から出かけて来
毒蛇らが出て来 そして悪いいろいろの考えが出て来ます。
世界は黙り込んでいます。その世界の
つくり主であるあなたが立ち去ったために。

あなたのお顔が ふたたび照ると 世界もふたたび明るくなります。

地上の国々は 祝いの色どりに燃え立ち
露にゆあみし きらめくよそおいになり

腕をあなたに向ってさし上げながら あなたを拝みます。

どの生きものも いそいそと動き 喜んで草を食い

すべての樹と草とが成長し

すべての鳥たちが巢から飛び出し

彼らの飛翔は あなたへの讃歌です。

すべての魚は水の中を泳ぎまわり

小さな羽虫らも 飛び立ちます――

あなたの眼なさしが彼らに触れるために。

あなたはわたちの胎内に いのちの果実を成長させ